

嬢令息並に出淵夫人、阿部夫人等の遺族を招待し大講堂正面に黒田清輝画伯の苦心に成る個人の油画を掲げ祭壇を設け定刻来賓、學員並学生一同著席するや学長法学博士岡村輝彦氏は恭しく祭壇の前に進み左の祭文を朗読せられたり

大正二年九月六日茲ニ祭壇ヲ設ケ薦羞ヲ具ヘ謹テ故中央大学長法学博士菊池武夫君ノ靈ヲ祭ル恭シク惟ミルニ君博學浩才一世ニ絶シ其自ラ持スルヤ謹嚴清廉富貴モ致ス能ハス威武モ屈スル能ハス其人ニ接スルヤ寛厚容与常ニ青年ヲ指導シ後進ヲ誘掖シテ各其所ヲ得セシム抑モ我校創立以來正二三十年ニ垂ムトス其間能ク数千ノ人材ヲ邦家ニ貢獻シタルモノハ主トシテ君ノ力ナリ況ヤ我校運日ニ隆昌都下幾多ノ庠序ノ間ニ在テ巍然トシテ一方ニ雄視スルコトヲ得ルモノ君ノ功ニアラスシテ何ソヤ嗚呼君逝テココニ一年ヲ超ユ仰テ祭壇ニ対スレハ温容宛然トシテ在スカ如ク俯シテ同人ヲ顧レハ遺徳歴歴トシテ眼ニアリ乃チ泫然トシテ昨ノ悲愁ヲ新ニシ悚然トシテ君ノ遺業ヲ墜サムコトヲ懼ル語礼ヲ備ヘス文情ヲ尽サス唯夫レ其孚ヲ薦ム尚クハ饗ケヨ

大正二年十月六日 中央大学長法学博士 岡村輝彦

次に中央大学学生総代樋貝詮三氏は左の祭文を朗読し

回顧スルニ故菊池先生ノ溘焉トシテ生等ヲ棄テ給ヒシヨリ業ニ已ニ四百五十有余日ヲ経過ス而モ先生ノ遺訓ハ生等カ耳染ニ尚新ナリ先生逝クト雖モ精靈ハ猶在スカ如シ是一ニ其感化ノ深キニヨラスンハアラス方今世情日ニ輕薄ヲ加ヘ此風潮ニ侵サレサルモノ殆ト稀ナリ然ルニ我中央大学ハ超然卓立質実

347 故菊池武夫博士追悼会

〔法学新報〕第23卷10(269)号 大正2年11月2日

○故菊池博士追悼会 中央大学に於て去月六日午後四時より前学長故菊池博士の追悼会を催して未亡人、令嗣香一郎氏其他令

剛健ノ校風ヲ發揮シテ教育界ノ重鎮ヲ成ス是レ豈先生ノ遺徳ノ然ラシムル所ナラストセムヤ思フテ茲ニ至ル追慕崇敬ノ念得テ禁スヘカラス今ヤ幽明境ヲ異ニシ復警咳ニ接シテ教ヲ受クルニ由ナシ秋風蕭殺感慨転深シ哀悼曷ソ罄キム

吾中央大学ハ本日ヲトシ先生ノ追悼会ヲ举行セラル生等亦席末ニ侍シ謹ミテ英魂ヲ祭り敬慕ノ念ヲ致スコト此ノ如シ靈ヤ魂ヤ庶幾クハ降臨シテ生等カ微志ヲ受ケヨ

大正二年十月六日 中央大学学生総代 樋貝詮三

右了るや三宅碩夫氏は左の演説を為し

私は本日中央大学に於て前学長菊池先生の追悼会を開かれまして親しく先生の薫陶に浴せし後進の一人として多年教養を辱うせし學員の末輩として茲に先生御生前の事蹟を追懐し恩威並ひ有せらるる御肖像の前に於て髣髴警咳に接する感想の裡一言を述ふるを得るは光榮の至りてあります、謹んで先生の御来歴を按しまするに先生は安政元年七月十八日盛岡藩に御生誕遊はされ明治八年七月十日法学研究の爲め米国に留学を命せられ御帰朝の後十三年十一月始めて司法省に御出仕に相成り爾来同省に於て民刑局長其他数多御歴任になりました御執りになりました所の事務は所管普通の官吏として御扱ひになりました外に、代言人判事検事の試験委員、帝国大学の講師、法律取調委員の主査、或は起草委員に御為りになつて居ります、我か学校と關係を持ちました本は、明治十八年の八月に英吉利法律学校を創立せられました御一人てこさいまして、下つて十九年の七月に正六位に叙せられ明治二十一年

に法学博士の学位を授与せられ、二十四年の四月に至りまして中央大学の学長に御為りになりましたのであります、同年の九月に官を辞せられまして、当時代言人の業務に御従事に相成つたのであります、同年貴族院議員に勅選せられまして、引続いて弁護士事務を御執りになつて居りましたが、四十四年の七月に至り御病氣に御罹りになりました、後種種御療養怠りなく御尽しになつて居りましたのでこさいますか、御病勢は險悪の域に御進みなされましたか、官は先生の功を録して正四位に進められまして勲三等に叙し、旭日大綬章を授けられたのでこさいます、遂に四十五年七月六日御永眠に相成りました、当日は恰も本大学に卒業式を舉行されて居りましたのでこさいますか、其午後三時式を終る頃先生は遂に不帰の客と御為りになりました、卒業式の終りと先生の御永眠の時間と之を一に致して居ると云ふことは、我我薫陶を受けし所の學員に於きましては一層の感慨に打たれざるを得ない事柄であります、越えて九日の二時三十分には我か大学は校葬の礼を持ちまして、駒込の吉祥寺に葬儀を営まれ、染井の墓地に於きまして先生の英魂は長へに今日に至ります迄、今後万世の後に至ります迄も、安らかに御休みになつて居る次第でこさいます、私共か先生の御来歴を按しますれば大要斯の如くであります、取分けて奇妙に感じますことは先生は如何なる因縁に依りますか、七と云ふ数字の月には何か御身分上に著しき御變動かあるのを、此御経歴を調べると同時に不思議の感想を起したのであります、御誕生の月も七月である、

米國に御留学になつたのも七月、始めて位階を御受けになられたのも七月であります、御病氣に御為りになりましたのも四十四年の七月で、御卒去になりましたのも四十五年の七月である、数へ来りますれば此七の数字は先生の歴史を終始貫いて居りますと云ふことか、何か因縁のあることではなからうかと考へらるるのであります、先生は何か後進に対し一の暗示を御与へになつたのではありますまいか、申上げるまでもございませぬか、先生の御服装より日常の起居動作に至るまで及公なる事柄若くは御執務の状態に付きましても、一の信念を持つて世に御立ちになつて居りました所の偉大なる巨人でございました、然るに先生は何の關係よりして斯く七の数字を以て歴史を一貫して居らるか云ふことは、私共は単に之を無意味なりとして閑却することは出来ぬのであります、蓋し先生の菊池宗とも称ふべき所の信念は、既に我我後進に向つて十分なる御訓戒を垂れて下さつたこととございませぬか、また先生の訓戒に親しく浴せられない所の後進、或は先生の居常を親しく見ることの出来ない所の人人に對しまして、菊池宗の何たることを遍く知らずる機会かなかつたと云ふことは、蓋し免れないのであります、故に先生は菊池宗を發揮して我か学校は固より申すに及はず、遍く我か帝國をして菊池宗に近寄らしむべく、菊池宗を守らしむべく先生は努められたのはありますまいか、所謂七度人間に生れてどうか此菊池宗をして、我か國教にもしたいものであると云ふことを御暗示になつたのであると考へるを相当とするので

あります、若し先生にして此御考はなくとも我我は先生の菊池宗をして、どうか斯の如く今後成功を期せなければならぬと思ふのでございませぬから、我我幸に今後幾十年間の生命を保ちますとも、其期間の短かいことは申すまでもないこととございませぬから先生の靈若し七度人間に生れて、群生を救済すると云ふ御念慮がありますならば、我我は後進の一人と致しまして願くは七度人間に生れて先生の忠僕となり、先生の信念を遍く世人に知らしむる木鐸となりたいものと考へるのでございませぬか、是は別に根柢はございませぬか、追悼の席上澎湃として起りし一の感想でございませぬか、斯く私共か先生の所謂菊池宗なる遺訓に對しまして、斯の如く考へる所の大略は之を述べんと欲するも、其事柄や偉大であります、事項や誠に繁多であります、到底短かき時間に於きまして私共の感する所の十分の一をも述べることが出来ないと考へますから、唯卑近にして我我の最も感して居る、最も屢々遭遇致しましたことに就て、其二三の事蹟のみを捉へまして、さうして所謂菊池宗なるものは、斯の如き些事に至るまで其真理の潑瀾たるものあるかと云ふことを共に御追悼申し上げます、其他先生の御人格の高き事柄、或は學術上のこと或は巨人の事蹟若くは私人交際の間につきましても、之を推拈めて御考へ下されまするならば、先生の全部即ち菊池宗の一般か十分御分りになると思ふのでございませぬか、先生の徳を追懐し、先生の学殖を感称し先生の全部を語り悉さんことは到底及ばない所でございませぬか、其学識の豊富なる事、人格の如何に

高潔なりしかは概括的に申上げますれば、唯今岡村学長よりの祭文として承りました通りでございます、私は諸君と共に親しく承つた所の一事実と致しましては、卒業式を当大学に於て行はれましたことは、学長の就任以来二十回を超えて居るのであります、其卒業式に就て卒業生に向つての先生の告辞は、毎回我我は之を承るに其意味の深遠にして、其述へらるることの最も平易なることは何時もなから強き感激と深き印象を有して居る次第でございます、其述へられる所のものは何時も華を去り実を採らざることなく、又論旨は如何にも之を守るに難からずして而も終生之を行ふも猶及はざるを恐るるのでございます又述へられる所の真理は甚だ深からず又甚だ広からず之を測量するに苦しむやうなことはないようでございます、一に平平凡凡たる御話の如くであるか、退いて其御趣旨のある所を謹んで考へて見ますならば、誠に千萬無量の意味を籠めて御話になつて居るのでございます、自ら生みし所の子を愛する熱情よりか今少し深き所の恩愛を以て、より高き所の慈悲の御心を持ちまして、さうして卒業生を送るの言葉と、世に処する所の大方針を授ける所の御告示であるのでございます、我我か之を守りました所か之を守つて十分守り尽せず、之を行はんと欲して行ひ得ざる如き意味の広大なる事柄を、斯迄先生は簡明に、斯迄平易に、斯迄滑りに御話下さつて、我我後進を御諭し下さいました所のものは先生の徳の円熟致しまして、所謂遍く行渡つて居る所の徳性涵養のおありになり造詣の極致に達せられしにあらされは決

して斯の如き御諭しを下さることは出来ないかと考へるのでござります、次に先生の平生の御服装を拝しますれば誠に簡単なる、清楚たる、華美に走らず而も礼節に欠くる所なく、毫も衣服の御身に纏ふを知らずと云ふ如き御有様、是通常の人より考へますれば如何にも変なやうでございますか、菊池先生としてあれだけの位置、あれだけの御身分でありまして、而して服装に就て先生の平素斯の如くなるを伺奉りますれば、以て先生の人と為り如何、人格如何と云ふことか想像し得ると思ふのでございます、或は健康の爲めと云ひ、或は運動の爲めとは仰せられて居りましたか、雪の朝と云ひ、或は風の夕と云ひ、徒歩て学校に御出にならなかつたことはないでございます、事務所に御通ひになるのも何時もこれでありました、役所の往復悉く亦そうであります、是か先生晩年の光景でありました、我我親しく目撃致した所の先生居常の御行でございます、理屈は色色付けは付くてございませうか、先生の職務と先生の御年齢とを以て致しまして、此御服装と此御行を為されたと云ふことは、是亦先生か我我後進に向つて深く教を垂れられたのでありますと思はるのでございます、先生の富を以てして時好の衣服を作る何の難きことと是あらん、先生の位置を以てして肥馬に鞭つ何の難きことと是あらん、然るに彼の清楚たる服装と徒歩の御往来とは是正しく菊池宗の或一部分は之に依つて、我我後進に眼前教を垂れられたのであらうと考へるのであります、海に五十万噸の縁鱧を浮へましても、陸に二十箇師団ありましても尚外交は

萎靡不振の時に於きまして、先生は徒歩を為され、清楚たる服を召されて先生の人格は為めに傷けられず却つて其彌高きを感じしめたのであります、内容充実せは外形の如何は問ふ所にあらざることを知らするに余りあるのであります、若し我か廟堂の人先生の心を以て心と致しましたならば、五十万噸の軍艦は無論必要はございませんまい、二十箇師団固より無用でございます、然るに内に信念なくして徒に外を誇張し、以て国権を伸ふる方法を確立致さざる我か廟堂は、外交に於て何時も失敗を来して居ると云ふことか、所謂菊池宗の何たるかを味はさる一の欠点であらうと思ふのでございます、菊池宗を推拈めましたならば、外交は今少し振ふこととてございませう、国権は今少し伸ひるてあらうと思ふのでございませう、是等の事柄も先生か御在世の時に遍く廟堂の人をして、菊池宗の信念を知らしむることか御出来にならなかつたのであらうと遺憾に堪へないのでございます、又在野の政治家なるものを見ますれば、動もすれば官僚である、官権万能であると呼号致しまして、冷罵を極めて居りますか、偕一度議員になり鉄道は乗車券を呉れる、其方方の挙動を見ますと打つて代つて誠に訝しき限りてございます、乗車券なるものの性質は私共法理論として研究したこともございませぬ、且行政上如何なる取扱になつて居りますか詳しく存しませぬか、蓋し読んで字の如く乗車の出来る所の切符に相違ないのであります、乗車券と入場券なるものは別別になつて居りますか、送迎のため入場するに当りて此入場券を買つて入場する所の議

員は見ないのであります、「パス」を有つて居る人は悉く入場券を私して入場し得るものの如く心得て居りますか、是瑣瑣たることではございますか、議員として国法を案立し、或は国政を料理せんとする者か是等の濫用を敢てして居ることでありませぬは、官権も恋しくなるのでございませう、官僚も固より望ましくなるのであらう、一事は万事なり今少し大なる問題にも指を染めたくはなりませんまいか我我か寒心する計りてはありません少しは反省しても可くはありませぬか、然るに先生は之に対して如何てありましたかと云ふと、私用を以て御乗車になる時は決して此「パス」を濫に御使ひにならなかつたのであります、必ず適当なる賃金を払つて乗車券を御買ひになつたのであります、官僚と罵り、官権万能と嘲ける所の議員等か先生の挙動を拝したならば如何考へるてございませう、又先生は近距離に在学中の御小供方を御連れになる時、或は我我後進と共に野外の散策を試みられる時に、近距離は三等で宜いじやないかと何時も仰せられたのであります、先生の位置、先生の御年齢を以て斯く仰せられ又之を実行して御出になつたと云ふ事柄を考合せますれば、誠に先生の徳の高きこと事毎に行渡つて御出になることに想到せられまして我我は慙愧に堪へない次第でございます、之を「パス」を濫用する所の人人に較へますれば其差霄壤も畜ならずでございます、況んや鉄道収入の減するを恐れて色色計画致して居ります所の政府も、其従業者、俸給から言ひますれば誠に僅僅十何銭と云ふ日給を授けられて居る雇の家族に対し

ても、暑中には家族一人に対して全国の乗車券を与へると云ふことか現に行はれて居るさうてございます、我が政府に職を執る所の官吏は斯の如く乗車券濫発を平氣てやつて居りますから、大きいことに就ても猶更間違かあるのてございませう、若しも此人人か国政を料理するに当りましては収支を審にしなければならぬ、公私を区別しなければならぬと云ふことを悟ることか出来ましたならば、我が財政の疲弊は之を救ふに余ある方法か幾等もあるてはなからうか、実に菊池宗の何たることを知らざる輩か斯の如き間違を致します為に、先生は既に此世に於て十分の訓戒を垂れられましたか、御死去後尚群生を救済する必要のあることを御懸念遊はされたのではないかと思はれます、それから先生か弁護士に御従事になりました我我後進を誘掖せられました所の一例を此席に於て述べますことは、蓋し追悼の意味に於て大なるものであらうと存します、私は先生在官中執られた所の方針及日常如何なる御執務振なりしかは遺憾ながら親しく承知致さないものてありますか、弁護士としての一二を述へて見ますれば、所謂大家なる弁護士は事務か多端なると彼は色色の御差支かある為に、記録杯は実は余り御覧にならぬのか普通であります、是は大家の通弊と云ふよりか寧ろ已むを得ざる境遇であります、大家の門に集る所の訴訟は数も多うございませうし、又困難なることか多いのであります、仍て大家先生自ら筆を執り、自ら調書を調へると云ふことは不可能てございませうか、先生は之に反して自ら意見を御書きになりました、事件は記録の

裏表を十分に御調べになり、且あらゆる事実を綜合し、或は分解し、以て此点の調査を斯く為すへし、之に向つての証拠は何何をすへしと云ふことを一一御指摘になつたのであります、否御指摘になるのみならず御自身御持ちの「ノート」には一一之を御書留になつて居つたのであります、而して弁論の順序方法も亦一一先生の記録に御書留になつて居ります、世の或一部の大家に共同弁護士かありますならば、自ら先にやらなければ氣に入らないと云ふ人かございませうか、先生は之に反しまして何時も後進の者に於て十分責任を有つて弁論しろと云ふことを言つて、先生自ら先して弁護の衝に当られると云ふことはないのてございませう、必ず他の弁護士をして十分やらして、先生は之を静聴せられて一一御自身の「ノート」に对照し一より十迄の論旨かあるとしますれば、一の論旨は甲弁護士之を論したりとするならば、直ぐそれを消してお仕舞になる、又第二の論旨は乙弁護士之を論したりとするならば、第二は消してお仕舞になる、第三もさう云ふ方法てやりますと、消してお仕舞になる、「ノート」の第一より第十に至る迄皆抹殺されて仕舞ひましたならば先生の順序になつて、先生かお立になつても、先生は再び同様のことを御繰返しにならなかつた、他の弁護士に於ては同し論旨にしろ其十中の七、八を述へて、多少足らざる所かありますれば此論旨か少し足りないから云々と云ふこととて、補ふ大家もございませうか、先生は之を為さるなかつたのであります、裁判官も十分学識経験を備へて居らるる人て聴いて居るのであるか

ら、既に述へし所の弁護士の論旨か十中の七八までを述へて居るならば、其後の二三に就て殊更に不足を補ふには及ばぬと法廷の威権に敬意を表して居られました、さうして論旨は既に前弁護士の述へた所に於て尽きて居るとの裏書を与へらるるか、或は唯題目のみを挙げられると云ふことか先生の弁論として私共が最も多く承つたのであります、誠に大家の美德として如何に床敷御仕打にして又如何に雄雄敷振舞てはありませぬか、先生が事毎に就きまして後進誘掖の念か如何に深かりしかを窺ひ奉るに余あるのでございます、又処世の道如何にせは可なるやと云ふことに就きまして、同じ業務を執つて居りますに拘らず、後進の者に向つて処世の道は斯くすへし、斯く辿るへしと云ふことを、一一手を取る如く御示しに相成つたのであります、又我大学が基金を集積して事業の発展に資せんとするの議起るや、義に勇むの念猛烈なる先生は言下直に鉅額の寄附を遊はされました、同人は挙つて其速決に感歎せざる者はなかつた、否其額の大なる寧ろ一驚を喫したる次第でありました、先生の富の幾「パーセント」を占むへき実に全財産、此の大なる数字を示すへきものでありました、先生口徒らに嘉言を語らず又善行を責められず、然れとも嘉言必ず之を行ひ善行人に後ることなきは先生の先生たる所以てはありますか、扱先生の晩年まで我大学に寄与せらるる熱烈の御同情の迸り發したる蹟なるを追想致しますれば、我我後進は畢生の努力を本大学に提げ、先生の遺範に背かざる様日々服膺せざるへからざるは申す迄もなく、我大

学の先進各位及世の仁人君子先生の遺志を紹き、此目的の大成に落伍せられざらんことを、僭越ながら敢て先生の御肖像の前に於て警告致しまするも、亦先生追慕の念抑へんと欲して止むる能はざる所てあります、私共は多数の先進を戴いて居る者ではございますか、先生の徳を慕ひ奉る毎に、願くは第二の菊池先生あれかし、第三の菊池先生出てかしと願つて止まないであります、斯の如く我我後進に向つて恩愛深き所の先生は、五十九歳を以て昨年卒去に相成つたのでございまして、今少し天寿を全うして下さりましたならば、東西を分つことか出来得るのであつたらうと遺憾に思ふのでございませぬか、惜むらくは先生と後進の我我は幽明地を異に致します今日になりましたは、如何にしても先生の御在世中の教を受けることに熱心足らざりしことを恨むより外はないのでございます、来賓諸君の中に於かれましても日夕親灸せられました所の御方もございませうか、私の申上げましたことは卑近にして何人に於ても氣の付くことである、何人も実行し得らるへきことであるか、先生は既に之を實行し尽されたのである、否進んで我我に範を垂れられたのであると云ふことを申上げまして、聊か追懐の意を此席上に表します、猶願くは在天の先生は我我後進に對しましてどうか監督の羈を緩めず七世の後迄も加護に努められんことを幾重にも御願ひ致しますでございます、幸に我大学は岡村学長其任に当られました御尽力下さつて居るのでありますか、二十有余年の間学長にあらせられし所の菊池先生の遺風、遺徳は既に我我大学の学風

を成して居ることてこさいます、仰けは益々高く、臨めは彌彌深き所の広大なる先生の御徳は、我我後進か争てか此席に於て述へ尽すことの出来る筈のない程夫程広大なのであると申す外はありませぬ

次に新渡戸稲造氏は左の演説を為し

昨年八月の上旬でございました、私が丁度米国から英国に渡ります船中で、明治天皇の崩御になりましたことを承知いたしましたので、倫敦に著きまして御大葬の事を問合せに我大使館へ参り新聞を見て居りますと、私と同道致しました某法学士が傍に在つて同じく新聞を見て居りながら、先生、菊池さんが御亡くなりになつたやうてこさいますといふ、所か私が見て居つた新聞には其報道を掲げて居りませんでした、ナニ、菊池さんとは何方？、菊池博士、菊池博士と云ふ方はお一人てないか、どの菊池博士だと尋ねると某法学士が言ふに、ソレ、何時も、先生の菊池武夫さんてこさいます、このソレ、何時も先生のと其法学士が言掛けた、其言葉の中に私か菊池博士に対する関係の浅からざることを含んで居ると思ひます、先生のとは何た、僕の菊池博士とは何た、唯我輩の同郷の人、盛岡の男と云ふことであるか、さうじやない、唯我輩の先輩たと云ふことであるか、さう云ふ意味でもない、先生のと云ふ言葉の中には私か日頃菊池博士に対して一方ならぬ尊敬、否敬愛の念を以て考へて居つたことか含まれてを、私は予て恩を受けて極く忘れ易い凡夫であるから其恩を忘れまいと思ふか為に今迄五十余年世を渡つて居る間に、此人に

は恩に預つたと思ふ方方か五、六名もあるか、其名前は特に書き記して置いて、御恩を受けしことを忘れぬやうに努めて居るのであります、其五、六人の中に菊池武夫と云ふ名が記してあるのであります、以て諸君は如何なる追慕の念を以て私か此席に列つたかと云ふことを、御察し下さることか出来るたろうと思ふ、もう博士か此世を去られてから丁度今日で十五个月、私は帰朝して直に青山の墓地に行つて博士のお墓を尋ねたのでありますが、無論青山に見出すことは出来ない、其後染井のお墓へ御参りをして深く往事を追懐いたしますと、とうしても十五个月以前に此世を去られたとは考へられない、能く世に去る者は日に疎しとか申します、時間或は空間の境涯を脱して靈界に歩む人の早い事——吾吾五官に制せられて居るものは亡き人の跡を追ふて其声を聞かふとし、或は其面影に接しやうとして何程心か急いても迎も追付くことは出来ない、心の足か疲れて去る人とは益々遠さかり、遂には其面影を全く失つて仕舞ひ、数年経つ中には其名さへも忘れて仕舞ふ、青山に往つても、染井に往つてもオオこんな人か嘗て生きて居つたなと思ふことか沢山ある、而も位とか、爵とかのある人人の高い大きな石碑に対してもそう思ふ事か屢々あります、其生前には人並以上栄えた人も去つた後では日に疎くなつて、遂に其名さへ忘れられて仕舞ふのである、然るに世の中には忘れやうとして忘れることの出来ない人かある、勿論五官に左右されて居る吾吾は能く気をつけて努めなければ忘れられぬ人さへも忘れ勝てあるか、かく吾吾は忘



れ易いからして殊更に心にとめて忘れぬやうにせねはならぬ人がある。唯一瞬間に起る死と云ふ現象、死と云ふ単純な出来事の為に数年来敬愛して居つた親さへ、又友人、先輩、先生てさへ、忽ちにして死なる真黒な幕に隔てられて幽明境を異にしてもはや近寄ることか出来ないやうに離れて仕舞ひ、其幕は押しても開くことなく、覗いても見ることか出来ない、この幽明境を異にするのを人生はこんなものであると、思切つて去る者は日に疎し、もう後から追ふ必要もない、忘れて仕舞へ、却て思出の種となつては為に宜くない杯と妙に悟を開くものもある。併し私は迷信か知らぬけれども自分では有難いと思ふことには死生の区別を明に立てることか出来ない、諸君は法律を学はる方であるから、死者と生者との区別は法律上明に立てられて居るのであらうけれども、法律で区別されても法規以上に穿鑿したならば、誰か死んで居るのか、誰か生きて居るのか分らない、法律を知らぬ我輩には死生の区別か殆ど付かない、所謂去つた人か今此所に現に居るか如き感がある、忘れやうとしても決して忘れることの出来ないやうに、目の前に始終生生と残つて居る人がある、少なくとも我輩の記憶にはさう云ふ人がある、私は独逸の詩人ウーランドの作を好んで読みます、と申しても此詩人の大作は私の力に及びそうにないから小品を見るのですか、辞の美しい事、深味のある事、妙味のある事には深く感心して折折開いて見ます、今此壇上に登つて思出すのは彼の世界に名高い詩てありますか、とうも私には此所で翻訳する力はありません

んから意味丈けを御話しますと、三人の青年か町から田舎に散歩に出掛けましたか何時も行く彼の酒屋に寄つて一休みしやうてはないか、あそこの酒は良し、娘は美人たと話して三人は酒屋に足を止め、酒を誂へて飲みながら、家の主婦さんに、此方の娘さんはどうしたと尋ねますと、主婦はアア、娘は彼の室に居ります、三日以前に亡き人となつて、明日は葬式をする所ですと答へる、そこで三人の青年はオオそれでは其死骸に対して別を告げたいと云ふ、それならばどうそ別室に御出下さいましと案内されて行き、第一の青年か既に棺に横つて居る少女の顔を覆ふた布を取つて、アア何と云ふ美しい乙女た、汝此世に在つた時には深く汝を愛したかと云ふて、又布て顔を覆ふて退いた、第二の青年か次いで棺に近づいて同じく覆面を取つて、何と云ふ美しい女た若し汝此世に蘇生するならば如何に我は汝を愛するであらう、と言ひながら又顔を覆ふて退いた、今度は第三の青年か近いて同じく覆面を取つて、アア美しい乙女よ、汝此世に在つた折には我深く汝を愛したか、今此死骸を見ても我汝を愛す、又此死骸か朽ち果てても永久に我は汝を愛すと云ふて、覆面をして退いたと云ふ簡単なる詩である、第一、第二の青年のやうなのか此世には多い、生きて居る人に対しては尊敬を払ひ、愛情も捧げる、然るに彼か朽ちても尚敬愛の念を失はず、飽迄も愛すへきを愛し、敬すへきを敬する人か幾人あらうか、兎角去る者は日に疎して、吾吾の記憶の力は如何にも弱いものであると深く感じます、菊池博士か此世に在した折には幾千、幾万の

知己、友人、門弟があつたてせう、又其人人に与へ給ふた印象はとれほど深かつたであらう諸君はいさ知らず、我輩に取つては忘れやうとして忘れられないことが多くありますか、遺憾なから今は其一事をも語る時間かこさいません、私は遠い縁者ではあるか、屢々菊池家を訪れることもなかつた、然るに事ある毎には必ず相談をした、従来自分の身に重大なことのあつた時には必ず博士の意見を質した、又博士かさう云ふ時に与へ給ふた注意は今でも顧みて宜かつた、自分一人では迎も其判断が出来なかつたと思ふことか沢山ある、私は博士を追悼するに就て一番先に浮ふことは博士の事業よりは博士の人格であります、曩に世に忘れやうとして忘れられぬ人があると申しましたか、兎角忘れやうとしても忘れられること出来ぬ出来事か能くある、何か事かあつて怪我した事杯は中中忘れられぬことである、痛い経験、可笑しい経験などには忘れられぬものか沢山ある、けれども此人格に就て忘れやうとしても忘れられぬやうな人は少ない、然るに私は博士のことを思ふ時には博士の事業よりは寧ろ其人と為りを思ふのであります、事業に就ては他に求める必要はありません既にかうして御校に参りまして此建物を見ても、又斯く大勢の学生諸君か御集會になつて居るのを見ても、是も博士の事業の一つである、又法典の編纂なり、或は貴族院の種々な委員会に於てされた仕事を見ても分りまた他にも色々こさいませう、か私は事業を見て博士を追慕するのてない、寧ろ其人と為りを追慕したのである、第一私は常に博士に就て感した

ことは常識の発達して居た事である、是は博士の修められた学問の關係もあつたらうと思ふ、即ち英吉利法は独仏法とは違つて、常識を涵養する点に於て非常に力があるものであると存します、加ふるに博士は最も理性の発達する時代、即ち青年時代に常識を以て国民性として居る米国にあつて学問された為めでもありませう、無論私か此所て常識の発達か秀て居つたことを申ししても、其常識なる言葉を学問と云ふ言葉に相對して言ふのではない、常識か発達して居つたから学問の方は左程発達せぬと云ふ意味ではない、博士か専門の学識に如何に造詣深かつたかと云ふことは私は彼是言ふ資格を有つて居らぬ、又此常識に就ては色々意味の取りやうもあらう、或学者の如きは我は常識を重しない、常識ては真理の発見か出来ぬ杯と云ふ人もあるか、私は博士を見て博士に於ては、常識か能く発達されてたと思ふ、常識ここに常識といふものは所謂判断の力を与へるもので博士は問題かあると、何とかその解決を付けて、是は斯うであると如何にも明瞭に判断される、私は何か一身に難解の事かあると、博士に相談をした、而して其判断か大概当る、又動もすると此判断力のある、或は常識のある人は兎角之を濫用するとても申しますか、己の為に此力を用ゐて人の為に尽さぬ弊かある、世に所謂実務家とか、實際家とか云ふ人に能くさう云ふ風かあるか、博士は常識を用ゆるに極く公平無私な見地からされたのであります、又他の諸君も直接接せられた方は同じやうな感を持たれたであらうと思ふのであるか、博士の公平無私なる行為は誠

に真似して真似の出来ない所である、先刻も弁護士としての博士の遣方を御話になつたか、能く其一端を現はして居る、利欲の為に事をすると言ふことか、又此公平無私なことに伴つて親切であるのは当然である、然るに世間にはどうかすると公平無私でも冷淡な同情の少ない人があります、私は人に接して、噫立派な人だと思ふか、それと同時に誠に冷かな人であると思ふことか、程度ある、博士にはそれかなかつた、私は明治六七年頃博士の洋行前から博士を存して居りますか、その頃から博士に会つて一番先きに感ずるのは博士の円満なる性格でありました、口数は少ない人であつたけれども、常に友人或は後輩のことを思つて居ることには、私は熱ら感服して居る、是は話か自分の事に当るから可笑しく御聴きになつてはならぬか、我輩か此話を申上げたならば、実は我輩にもそんな事を言はれたことかあつたと言はれる方かあらうと思ふ、私か北海道に居つた頃休暇に一度東京に出て来た、さうして博士の所を訪ねた、すると博士は君、北海道に何時迄も燃つて居ないで出て来たらどうかと言はれた、イイエ私は北海道の氣候も好きです、彼所に勤めるのは大変に面白と思つて居りますから、マア引込んで居りますと云ふた、すると博士はそんなことを言はずに出て来るか宜い、君は世の中のことを知らぬから、北海道より外に天地かないものやうに思つて居るけれども、もう少し広い世界を見給へ、丁度是从から小村の所へ往くから君も往き給へと言はれた、当時小村さんは外務次官をされて居つた、博士は殆ど押売の如く、

斯う云ふ者か何か使途はなからうかと云ふて話されたら、は、斯う云ふ所か空いて居るから往つてはどうかと云ふやうな話でありましたか、私は少し因循的て又北海道へ引込んで仕舞つたのである、これは一向此方から御頼みしたのではないのでありました、それから其後にも十余年前の事でありましたか、何か内閣の変動があつた折に滅多に來られぬ博士かヒヨツトやつて來られて、僕は或る役所の或る高い役に一人周旋してくれと頼まれたか是は中中六けしい役なので、色色考へたか、君とうたといふ御話でそれから甚だ軽い調子で近頃は君位な者でも可笑しくなくなつたといはれた、褒められたのであるか、貶されたのであるか、能く分らなかつたかそれは兎も角、二度も繰返して、遣つてはどうかと勧められたか、僕は俗務は嫌いたから御免を蒙りたいと断つたことかある、其時に此人は如何です、彼の人ならば事務も出来、法律の思想もあるから極く宜いてせうと云ふて、其人の名を指した、所か彼には他に又当てる所かあると言はれた、後輩の何の某は折かあつたならば、ああ云ふ所に入れてやらう、斯う云ふ者は此所へ入れてやらうと終始心にあつたものと見える、実に親切であつて、而もそれを親切らしく言はない、今も御話しましたやうに君位な者でもをかしくなくなつたといふやうな軽い言葉ではあるけれども、其軽い言葉の中に実に無限の親切と深い同情が含まれて居ることを私は感ずるのであります、私か重い病氣に罹つた時は必ず訪ねて呉れた、遠方に居つても必ず訪ねて來られた。実に博士は普通一般に

見ることの出来ない学者であつて、常識に富み、又己を責むること厳に人を宥すこと寛大であつて加ふるに人に対して親切であり深い同情を有せられた、博士の如くこれらの性格を一人に纏めた人か他に幾人あらうか、若しあつたならば忘れやうとして忘れることの出来ない人である、又もし吾吾の記憶の力が疲れて斯の如き人物を忘れさうになつたならば、努めて忘れぬやうに心掛けたいと思ふ、如何となれば斯の如き人が現在此世に居つたならば吾吾の心をとれ程強めるか知れない、吾吾は人が生きて居る間は兎角彼は短所がある様に見える、又普通平凡な人間の様に思つてをるか、一度其人か此世を去ると始めて気が付いて、オオああ云ふ人であつたかと云ふことを発見する、「知らざりき仏と共に起き臥して明け暮しける我が身なりとは」であります、吾吾は明け暮れ仏と共に起き臥して居ることかあつてもそれを知らない、肉体を持つて此地球の表面に居る間は仏とも思はず、失つて始めてどうも誠に惜しい人たつたと思ふ、せめて其惜しき人の姿か吾吾の記憶にあるならば御互に努めてそれを失はぬやうにし後から追ふか如くにして、もう一度此方を振向いて貰ひたい、もう一度声を掛けて貰ひたいといふやうに、靈魂との交を努めたいものである、博士は此世にあらるる間如何に辛いことか屢々あつたか吾吾の知る所ではない、此世を去られる当時にとれたけ御苦しみになつたかと云ふ胸中のことを尋ねて見ると、自分であつたならば苦しい様子もしたてあらう、身辺に居る者に小言も言ふたらう、六个敷い顔もしたてありません

う、然るに博士は従容として死を見ること帰るか如く、平然として後に遺る人に苦みを与へぬやうに亡くなられたさうであります、夫等の事、是等の事を考へて見ますれば、実に世に稀なる人を失つたものである、私一個人に取つては恩人を失つたのであり、御校に取つては良校長を失つたのである、又数多の人に取つては良友を失つたのである、博士が最後に河上さんに書かれた英文の御手紙の中に自分も左程に苦ますに樂に暮すことか出来たならば、生きて居つたのも全く無駄しやてやることか出来たならば、生きて居つたのも全く無駄しやない、博士の言葉を籍りて言へは「ライフ、イズ、ナット、エ、フェイリユア」とかいてある、自ら持すること質素にして友人を助けてやり、困る者を救つてやることか出来たならば其人の一生は失敗ではない、此精神が能く五十九年の間貫徹して居た、是は私其後に遺つた者か博士の恩願を受け、其温容に接した者は忘れやうとして忘れることか出来ない、又若し吾吾の記憶の弱きか為に忘れるやうなことかあつたならば、努めて記憶を喚ひ起し、いつまでも忘れぬやうにし度い、そうしてかういふ考を以て一生を全うしたいと思ふのであります

次に花岡敏夫氏は左の演説を為し

私は今回本校から通知かございましたので、何用を差置いても自分か恩を受けました故菊池先生のことでございますから、参らなければならぬと思つて居りました、少し時間に遅れて却て先輩の方方から色々有益な御話がありました後で

すから、とう云ふ風に御話になつて居られましたか十分に存  
 ませぬでしたか、私か菊池先生に仕立てられましたより非  
 常に以前から先生と御懇意でありました方方から、十分御話  
 かありましたこととございますし、又既に時間も遅いやう  
 に聞いて居りますし致しますから、私としては先生に就きま  
 して自分か遭遇致しましたことを追懐致すと云ふよりも、寧  
 ろ此機会に於て自分か長年間の先生の恩に報みたいと云ふ志  
 丈けを述べれば、自分の申上げることとは十分足りて居りまし  
 て、自分か不肖なる為に先生の教を受けながら、未だ十分先  
 生の徳を發揮することか出来ぬのを非常に慚愧に思つて居る  
 と云ふことを皆さんに一言申述べれば、自分の本懐は尽きて  
 居る次第でございます

それで唯今申上げました通り最早時間に於きましても差支か  
 ございますし、改めて特別に申上げることとございませぬ、  
 大体唯今の新渡戸先生からの御話でも明瞭致して居ります通  
 り、菊池先生は外に向つて名聞を求めると云ふやうな考は少  
 しもなく、唯自分か尽すべきことを為して自分で満足さへし  
 て居れば宜いと云ふ考を始終有つて居られました、夫故に今  
 日の世間より見れば或は性格としては最も平凡な、或意味に  
 於ては詰り無為にして往くと云ふ位な消極的な、又冷静と云  
 ふやうな風に言はれるかも知れませぬ、詰り自分か是て人間  
 として為すべきこととして満足して居ればそれで宜い、斯う  
 云ふ風な始終御考を有つて居られたやうに思ひます、苟も自  
 分か満足せぬ限りは色色の御考かあつたてせう、自分は自分

として是丈けのことをせなければならぬ、是丈けのことをす  
 れはそれ以上に何も人の前で騒ぐ必要もない、斯う云ふ一面  
 に於ては御考を有つて居つたやうに私は――間違つて居りませ  
 ぬかも知れませぬか――観察して居るのでございます、それで例  
 へは私杯にも或事の調査を命しまして、君かそれで君の調査  
 か満足であるか、満足であるならばそれで宜い、斯う云ふ風  
 で、漫りに自分からしてとうと云ふことなく、先づ君か君の  
 満足するだけのことを遣り給へと云ふやうな指導の方法を採  
 られたのであります、或は又私に用を言付けられますにして  
 も、直接に話をさるる場合の外は、即ち不在のとき用を言付  
 けて置かれると云ふやうな場合には、始終用を英文で書いて  
 置かれると云ふ風で、一寸見れば何も普通の用事を英文で以  
 て吾吾に書置いて呉れぬても宜いかと思はれますに拘らず、  
 詰り日常必要の迫らぬ際に於ても使はずに置けば、語学のや  
 うなもの鈍くなるから使つて置けと云ふ風で、詰り目の先  
 の必要かなくても自分は斯うして置かなければ自分の満足か  
 出来ぬからと云ふ風で、始終私杯にも色色な方面から御注意  
 を受けて居りました、是は此中央大学の学員又学生諸君に於  
 きまして、菊池先生かさう云ふ風に一面から言へば消極て  
 あるかも知れませぬか、詰り先づ自分の満足かなければなら  
 ぬと云ふ行動を始終執つて居られたと云ふことに就ては、恐  
 らく私の考は誤りなからんかと思つて居るのでございます  
 それから尚外部に向ひまして名聞を求めると云ふ考か少しも  
 なかつた為に、直接に接せられて居りました方方、若くは日

常接せられて居つた方は其性行を御承知でもありませんか、そうでない人は恐らく余り性行を観察することか出来なかつたであらうと考へるのでございますか、特に此点に於きましては質素なる美風が長く本校に残つて、所謂先生か校長であつたと云ふことは中央大学か真面目で、極く質素で、先づ自分は是丈けの事をしなければ満足せぬ、然る後に社会に向つて仕事をすると云ふやうな学風、恐らく是は将来も守つて往かれることであらうと考へるのでございます

それから尚さう云ふ風でございますから、先生としても非常に責任を重して居られたと云ふことは、是は事事物物に現はれて居ります、例へば先年私か色々御世話になつた先輩及友人の方を或場所に御招待致しました際に、先生は其頃から丁度病気に罹られました、気分が悪かりし為め事務所へも屢々休み勝のときでございましたか、別段のこととも御話のなかりし為め、私も是非先生に御出席を願ひたい、自分か世話になつた先輩及友人諸君か御集りの際でございますから、先生の御出席は最も先きに自分の心中に御願ひして居りましたのであります、然るに先生からは一向御返信が無かつたので密かに怪むて居りました処、其当日丁度私か先生の事務所に参りましたが、先生は其前に病気が起られました、(此時分か先生か台湾から帰られて発熱せられました最初の頃でした)暫く事務所へも休んで居られましたか、此日は事務所に来られませんでした時、私は先生に今日は自分の会に御出て下さるやを御尋ねしましたところ、自分は往く積りであるから

と云ふ御話でございましたか、時間になりましたも御見えにならない、とう云ふ訳かと思つて実は自分も意外に思ひまして御尋ねした所か、自分は往かうと思つて事務所に居つたけれどもとうも工合が悪いので已むを得ず途中から帰つたと、斯う云ふ御話でございました、其後は兎角先生は事務所の方へあまり御出か出来なかつたと云ふやうなことで、私共平素先生に接近して居りましたけれども、先生か其当時に身体の工合が悪かつたにも係らず、其所迄努めて居られたと云ふことをも知らずに居りまして、私から御願ひをして、御自分でも、君の会へ是非往くと御話になつて、其二三時間前迄も来られる決心で用意して居られましたか御出でか出来ずに終はり其後に於きましては事務所へも殆と出ない日が多いと云ふやうな次第で、今日から考へて見ますれば、先生の如き規帳面なる人か諾否の返信を差出さずに躊躇して居られましたることを思へば、詰り私の為に病気の具合を考へられまして当日までも迷ふて居られたことは明らかで、嗚其当時身体の苦痛があつたらうと思ふのであります、併しさう云ふ恩をきせる様な御話は私には其後とても毛頭なかつたのでございますか、其翌日から事務所の方も続いて休んで居られると云ふやうな風で、詰り私のやうな後輩に対しましても、自分の苦痛を忍んでまで出席されやうと云ふ御考を有つて後輩を引立てられると云ふ御精神のあつたと云ふこと、それから當時夫程迄御自分か病気で以て苦痛を有つて居られても未だ曾て其事を私に言はれずに、当日二三時間前にも自分は往く積り

てあると云はれ乍ら遂に御来会か出来ず、其以後彼の嚴格なる先生か事務所を休み勝になつた程迄苦しかったのを辛抱されて居つたと云ふことに就きましたは、私は之を以て自分かともも記念すへき日であると云ふことは今日でも忘れぬて居る次第であります、さう云ふ風に後輩を引立てられると云ふことに就きましても非常に努めて居られたのでありますか、私のやうな極く軽率な者でこさいますから、其時に於て先生の性格より見て何故に諾否の御返信か予めなかりしかを思ひ当らすして其時を過ぎましたか、後て考へますと実に御氣の毒な御願をしたと云ふことを常に感じて居るやうな次第でこさいます

其後先生か御病氣で以て非常に苦しくなられました、御亡くなりになる少し前てこさいましたか、私か本宅に御訪ねした時に、詰り先生とは特別の御関係もある方ではありますか、南部家の家憲を作らうと云ふことで、是は是非自分の責任としてやりたいと思つて居る、併しどうも工合が悪くて出来なかつた、さうして自分の所に来て居つたのは余程前の話である、どうもそれ以来工合が悪いから手を著けぬ、又どうか人に委せたくないと思つて今日迄来たか、之を一つ調べて見て呉れ、斯う云ふことを言はれましたのか、丁度御亡くなりになる二三个月前てこさいました、て先刻も申上げましたやうな風てこさいますから、先生か亡くなられます二三个月以前てこさいましたか、恐らく他人に向つて苦しいとか、何とかと云ふことは御話かなかつたことと思ひますけれども、併な

から自分で以てどうしても南部家の家憲だけは書かなければならぬと云ふ御考を有つて居られて、さうして苦しいのを我慢してやらうと思つても、書くことか出来ないと云ふことを考へますと、先生は口には出されぬか其頃は余程苦痛を感せられたのであらうと思ひます、さうして私は先生と南部家との特別の關係も承如して居りますので、それを書いて持つて参りました所か非常に喜はれました、併し其際に於きましても矢張私から一一説明したことを聞いて居られて、さうして自分か満足された場合には、唯心中で喜んで居られると云ふやうな風てこさいましたか、唯其事に就て私か申上げたいのは先生は御自分か是非やらうと云ふ決心があつても、自分の健康か許さぬ、氣分か勝れぬと云ふに拘らず、今迄私等に対して身体の工合か悪かつたと云ふことを彼是れ御話にならなかつた、さう云ふ風てこさいますから側に居りました私等、殊に私は一体軽率な点もこさいますか、先生か常に考を有つて居られても、十分に先生のお手伝をすることか出来なかつたと云ふことは非常に遺憾に思つて居る点てこさいます

それから矢張御亡くなりになりました丁度三月位前てこさいました、私か英吉利の会社法を書いて、さうして先生に斯う云ふ方針て以て、斯う云ふ順序てやると云ふことを御相談申上げました際に、先生の言はれるには、アメリカン、ロー、レビユーに此頃掲載せられた法人に関する論文があるか其論旨は欧羅巴大陸の学者は法人に付きて實在説とか擬制説とか互ひに論駁して居るかさう云ふ空論に走らぬて法人の觀念

は法理の研究以前より実際に存せるものであるか故に其實際の必要及び事実を基として論せねはならぬとて、真面目な實際な点に注意しなければいかぬと云ふことから、色々な御話がありました、是杯も先生か御亡くなりになります—私は今判然と覚えて居りませぬか—二、三ヶ月前位のこととてございました

尚私はさう云ふ風で事務所に於きましても極く軽率でありまして、十分先生の真意を了解することか出来ないのてございませぬし、殊に私は最も比較的新しいので、私以前に名士先輩も居られますし、又本校に居られます大場博士杯も矢張り私より以前に居られた関係もありますから、自然御尋ねしたならば詳しく御話があるたらうと思ひます、私としては此機会を利用してどうか自分の衷情の一端を述べて、自分か不注意であつた為に十分先生の真意を了解することか出来なかつたのは頗る遺憾であつて寧ろ今日は先生の遺徳を幾分なりとも了解し得る時節か来た時分には、既に時機か遅かつたと云ふことを感ずるのであります、どうか私のやうな再び轍を踏まぬやうに予め注意深からむことを学生諸君等の為に述べて置きたいと思ふて、一言申上げて置く次第でございます

終りに杉浦重剛氏は故人の徳を偲ふに足る所多ければとて故人の親友河上謹一氏よりの左の手紙を朗読せらる

故小村氏の負債は貴兄や故菊池氏の発起にて友人七名にて始末することになり其中に小生は加盟致居らざりしか加盟七人の中故鳩山氏か故障を申し立てたることを聞込み小生は其埋

合せに飛込みたる次第なれば最初の申合は承知致さず只五千円の金額を連帯にて負担したる仕合なりき然るに追追整理に取掛りたれば負債総額は五千円に非ずして壹万八千円であると云ふことか分て来た、そこで五千円は七人にて支払ふことになり貴兄や小生は無理算段をして受持額を支払つたか此義務を果たさなかつた人も大分あつた様に聞及んだ小生など所蔵の書籍を売却して此義務を果したる所「御前も存外鹿馬正直た」と菊池に笑はれたことかある然るに不少不足額は菊池自身か悉皆代弁したることと思はる

扱壹万八千円と申す負債を償却するには如何の方針を取て宜しきかと云ふ問題か起た是時齋藤修一郎氏か飛入て相談相手になる都合になつた尤も同氏は出金するては無く又自分で斡旋するては無く只其の細君の里方なる山田庄兵衛とか申す質屋の番頭か小生の差図に依て高利貸の間を操縦する都合になつた所此の高利貸の人数か二十八人であつた而して其の内の重なる者三四名と小生と会合して処分法を極むることになつた小生か彼等に向て曰ふに今小村を差押処分にしても財産とては三文もないのた彼か此処分逢へは外務省の方は無論免職た免職て腹癒しと云ふ覚悟ならば夫まてたか夫も金貸の本分と思へない三文にても取る方か利益とすれば小村を活さなければならぬ小村を活すとする場合には其の俸給の金額を金貸連にて取る訳には往かぬせめて小村一家の食料丈は彼に交付せねはならぬ其額は先一个月五十円位た此事だけは是非承知して貰ひたい此承知か出来なければ全部破壊の外はないと



云て談判したら彼等遂に承諾して整理の一段落か付た是より毎月二十五日即俸給の受取日には小村の俸給中より五十円を引去り其の余は之を金貸連の入札に付することになつた是初の間は百円に対し二十円以下を得て引下る金貸も多かたか追追競争か減するに従て其の率か三十円四十円五十円と上り最後まで残た債主は百円に対し百円を得るような工合になつた所何時頃完済したるか万事菊池の取扱に属した故小生は承知しないのである

当時の小村氏は窮迫其の極に達し本来無一物であつたか夫か則ち六祖と同様に大悟の端緒でもあつたであろう同氏の宅か近火に逢た時見舞に書生を遣したか焼かるへき財産は皆無故心配の様子も更に無かつた書生か試みに屋根の上にてコケラか腐て居て踏む毎に穴か出来たとの報告であつた丁度此頃であつた小村は高利貸に遂はれて容を匿し数日外務省に出動しなかつた外務省では掛替の無き翻訳局長に逃られては大變であるから遂に探し出したか到底一文なしては節期を越すことか出来ぬと云ふ仕合であつたか真逆容を匿して居る局長に勉強賞与をやる訳にも往かぬ故小生か此賞与を受けて夫を右から左へ小村に渡したることかある是時小村か小生の宅に来て言ふには此頃は米屋も魚屋も売て呉れない人力車帳場も車を出して呉ぬ故仕方なしに毎日役所まで徒歩する其の為めか胃病は癒たよと平然として居た

小村は金銭上友人には迷惑を掛け又自分の配下なる属僚にまて借用証書に判を押さした外務省に宴会課長と綽名した属官

か居た此などは何時も借金の相伴をしたとの事たか此男か死ぬまで小村は世話をしたとの話た小村に迷惑を掛けられた人か決して小村の事を悪く言はぬは即ち小村の徳たと思ふのである兎に角彼は豪傑た壹万八千円といへは今てこそ端金のようたか當時は中中の巨額であつた大抵の人ならば疾くに屏息するのたか小村は夫を切抜けて尚余裕かあつたのた

満堂極めて静肅に傾聴せり最後に嗣子香一郎氏立て鄭重なる謝辞を述べられ右にて全く式を終り六時半頃来賓並に學員諸氏には立食の饗応あり学生には茶菓を饗して散会したるか当日出席の来賓並に學員諸氏は石山彌平、稲木重俊、池田四郎次郎、岩崎鉄次郎、伊沢芳郎、井上敬吉、井上勝好、伊藤悌治、馬場愿治、原嘉道、林頼三郎、葉山万次郎、早川重躬、花岡敏夫、西川鉄次郎、新渡戸稻造、西川政成、西野其弟、堀江専一郎、本間信蔵、堀川寅次郎、堀竹雄、所銀作、千葉良胤、小倉敬止、太田時敏、大場茂馬、大脇範、小山田実、太田団野、大島三橋、岡村輝彦、岡野敬次郎、小山残平、沖津有喜世、渡辺豊治、脇田勇、河島台蔵、片山寛、川上定次郎、金井延、片山義勝、河野秀男、亀山要、川島任司、金沢卯一、加藤万四郎、加納友之介、笠原文太郎、川村貫治、川島桑夫、川手忠義、景山武夫、横山親、横田民造、横井横太郎、田村松之介、田上省三、田中文蔵、武田鬼十郎、高崎介蔵、高野金重、高窪喜八郎、高橋捨六、田中阿歌麻呂、武田明、滝沢茂雄、辻本友次郎、中山寛六郎、中村元嘉、長岡熊雄、内藤庄吉、難波弁太郎、村田祐治、村田甚三郎、野口源伍、熊川千代吉、窪田欽太郎、山口鋹太、

矢部廉、柳沢慎之助、山崎林太郎、山田三良、山本角之助、牧野充安、牧野菊之助、松岡高明、松尾参三郎、松隈昌隆、兼房重任、藤田隆三郎、古田良三、二上兵治、藤谷久六、後藤市蔵、小坂宇太郎、小松林蔵、小谷三雄、香阪駒太郎、近藤惠次郎、寺島由松、新井要太郎、安藤亮、安部藤治、青木昌吉、安達元之助、天野徳也、浅野正太郎、斎藤芳太郎、柵瀬軍之佐、佐久節、佐藤正之、霧生清蔵、木村精一、木戸梅蔵、湯浅豊太郎、水野加以智、三宅碩夫、宮地正彰、宮川琴次郎、三浦大五郎、三浦恵一、宮井基、南寿、宮崎三郎、所沢貞太郎、七辺格太郎、斯波淳六郎、塩谷恒太郎、広井辰太郎、日能脩太郎、土方寧、諸留勇助、守川元介、元田肇、瀬下清通、杉村広太郎、杉山彌太郎、杉浦重剛、鈴木濟美氏等にして学生も千五百有余名に達し近来稀に見る盛大なる追悼会なりき